

Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2016年11月7日発行 No.20

「なぜなら、あなたがたを聖なる者とする“霊”の力と、真理に対するあなたがたの信仰によって、神はあなたがたを、救われるべき者の初穂としてお選びになったからです。」

(新約聖書 テサロニケの信徒への手紙 II 第2章13節)

<KIU チャペルに響く素敵な音色も今年で10周年!! 一連の記念コンサートがスタート!!>

秋は、ピアノコンサートにチャペル講座とイベントが目白押しのキリスト教センター。それに加えてチャペルのパイプオルガン「ルナ」は、今年で設置されてから10年を迎えています。そこで、今年は奉獻10周年を覚えて記念コンサートが連続して企画されており、先週末もオルガニスト伊藤純子先生が中心となって「オルガンコンサート」が行われました!!

この日のタイトルは「色の色彩 ~音色の紹介~」で、伊藤先生がルナの音色、その音の魅力を引き出す曲を中心に、50分間演奏されました。また、演奏前にはパイプオルガンが製作される様子も紹介されました。様々な音色を持ち、バリエーション豊かな演奏を可能にするために備えられたパイプの数は、なんと1800本以上!!! Σ(°Д°;)マジ?

これからクリスマスや年明けにかけて、ほぼ月一回のペースで10周年記念オルガンコンサートが開かれます(中には外国から有名なオルガニストを迎えて行われるものもあります!!)。しかもこれら全てが無料!!というキリスト教センター&伊藤先生の太っ腹振り!?!に驚きが隠せませんが、これを機に、心癒すパイプオルガンの美しい音色に触れてみませんか? **素敵な音色が、皆様の歩みを豊かなものにすることを確証いたします!!**



10周年を迎え更に音色に深みが...



受付にボランティアの学生の姿が



熊本地震の献金も呼び掛け



40名以上の参加者が!!



オルガンの制作を語る伊藤先生

<先週のメッセージ>

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

10月31日(月) 野間 光顕(チャプレン) テマ:「KIUの最深部で起こっていること」

私は毎月最終日の昼礼拝が終わると、その月の平均礼拝出席者の算出をする。前期の月平均出席者は30,3名であったが、スタッフの働きに加えて、毎日の昼礼拝を覚えて出席して下さる教職員や学生・関係者の皆様の存在に心から感謝を感じる。では私自身に課せられた課題は何か?それはもっとこのチャペルに来てくれた一人ひとりの心や体を癒し、力を回復し、幅を広げ、繋がりを確認する、一言で言うならば「礼拝の質を高める」事だと思う。今週からチャペルでは皆の祈りを募集する「祈りの課題」BOXを設置した。それらを覚えつつ、このKIUの一番奥にあるチャペルで、この世を司る見えない大きな存在に心を込めて「祈る」事から歩みを始めたい。

11月1日(火) この日は音楽礼拝でした。メディテーションとしてオルガニストの伊藤純子先生の演奏するクリスマスの聖歌に皆で耳と心を傾けました。

11月2日(水) 野間 光顕(チャプレン) テマ:「プールで泳いで見えたこと」

先月からトレーニングジムに通い始めた私。そこにはプールも併設されており、約35年振りにキャップとゴーグルをつけて泳いでみると、トレーニング後の筋肉痛がほとんど無かった。不思議に思ってスタッフに尋ねると、水に浸かる事で全身に水圧がかかり、筋肉に溜まった疲労物質を押し出す事ができる。加えて心肺機能や代謝を高める、すなわち老廃物や毒素を体外に出す事が出来る…など体の調子を整えるための利点が水泳には多くある事が分かった。話を聞きながら、改めて「水」の持つ力の大きさに気付かされた。聖書にも「水」と恵みや奇跡が結びついている。私たちが集うKIUのマークにも水が描かれている。この世を潤す学びを積み重ねたい。

11月3日(木) 石原 正彦(キリスト教センター主務) テマ:「お風呂屋さんでホッ」

実家に帰るとなぜか「お風呂屋さん」に行きたくなる。大きな湯船に全身を浸し大きく伸びをすると、今日の疲れが取れいい気持ち。ふと見ると男の子3人(4年生、1年生、3才ぐらいだろうか)を連れてお父さんが入ってきた。家族のやり取りを見ていると、この子達は見えない父親と母親の愛の中で大きく育てている事を感じた。親の大きな愛は目に見えない。子供は当たり前と受け止め感じていない。しかし、子供が成長し、苦しい時に「お父さん、お母さん助けて!」と言えば、どれだけ親に反抗した子供でも、親はきっと助け、許してくれる。今日の聖書の箇所は、大変有名な「放蕩息子のたとえ」だ。私が、苦しみ、悲しみ、悩みを祈る時、神は目に見えない大きな愛で私の心を癒し、正しい方向に導いて下さる。

11月4日(金) 中原 康貴(チャプレン) テマ:「永遠の命を信じたい」

18歳で医師から余命数ヶ月と宣告された青年の母親から「なぜ、息子だけがこんなに早く死ななければならないのか」と詰め寄せられたことがある。すぐに言葉は出なかったが、しばらくしてこう言った。「私も彼がこんな早くに死を迎えようとしていることに対して神様に『何故ですか?』と叫びたい。しかし、だからこそ私はイエスの十字架と復活によって私たちも永遠の命に与ることを信じる。彼が短い生涯において神から与えられた使命を全うし、死んだら天国で神様と一緒に永遠の喜びに満ちた命を生きるのだと信じずにはおれない。」しばらくして母親は言った。「まだ、納得はできないが、私は息子が生まれてきてくれて本当に良かったと思っている。だから、私も息子が死んだら永遠の命を生きる信じたい。」 (文責:野間 光顕)